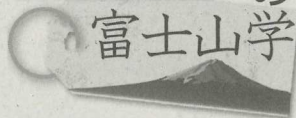


ジャンボ渡辺の学 富士山



1993年12月11日。鹿児島県の屋久島が世界自然遺産に登録されました。日本で最初の登録です。屋久島と比較して富士山を客観的に評価するために、先月、屋久島を現地調査をしました。

屋久島の面積の約20%、約1万坪のエリアが自然遺産の登録範囲です。原生的な天然林や際立った標高差による「自然美」と、高山を含む温暖帯地域の特異な植生が海岸線から山頂部まで連続して分布する「生態系」が評価され

屋久島から見る共通課題



渡辺豊博さん

観光客増と保全先進地に学べ

されたのです。

ました。年間45000人を超す豊富な降水量と海岸線から標高1936メートルの最高峰・宮之浦岳まで連続する山々。多様な動植物が重層的に密集した日本の秘境で、生きた自然博物館といえます。

しかし、50年代まではすさまじい乱伐と激しい自然破壊があり、樹齢数千年の縄文杉の群落が無造作に伐採されていました。島民が森の貴重性に気づき、山への意識変化があったことで保護運動が起こり、今の状況が奇跡的に保全

自然遺産登録から20年間。年間約30万人が来島し、27万人が山岳部を訪問します。踏圧による裸地化の進行やゴミの投棄、利用施設の混雑や故障、利用環境の不衛生化など、富士山と共通する課題が山積みです。2000年以降でも、20件以上の遭難が発生し、死者や不明者も増加しています。

また、施設の「維持管理費の不足」も深刻です。し尿の搬出やトイレの維持管理、使用済み携帯トイレ回収などの経費確保を目的として、登山口で1人1口5000円の募金を集めています。回収率は50%前後と低迷しています。

「屋久島町山岳部保全基金条例」に基づき屋久島町が募金収支を管理していますが、10年以降、登山者の増加に伴い、し尿の搬出量が2千万円を超えて赤字が拡大しています。

富士山では条例などの法的根拠もなく、任意で1千円の保全協力金(入山料)を徴収するようですが、今後、利用者負担や受益者負担、行政負担など保全管理のあり方が新たな検討課題といえます。

「山岳ガイドの質の確保」は、環境保全と観光振興の共生の仕組みをつくるためにも重要な課題です。屋久島では観光協会に所属

する山岳ガイドは162人います。20年前の8・5倍ですが、高額なガイド料や質の低下への批判が増大し、エコツアーリズムについてのガイドラインの策定が進んでいます。富士山でも、安全で質の高い富士山ガイド・登山のための制度設計が必要です。

屋久島では山岳部の利用に関する「負のサイクル」に苦しんでいます。施設が充実して利用しやすくなると、観光客が増えます。しかし、利用体験の質は低下し、事故が多発して施設の維持管理費も増加します。

富士山では今後、屋久島の経験から見えてきた課題を先取りした戦略的マネジメントと保全管理のガイドラインの策定が必要です。

(わたなべ・とよひろ
都留文科大教授)